

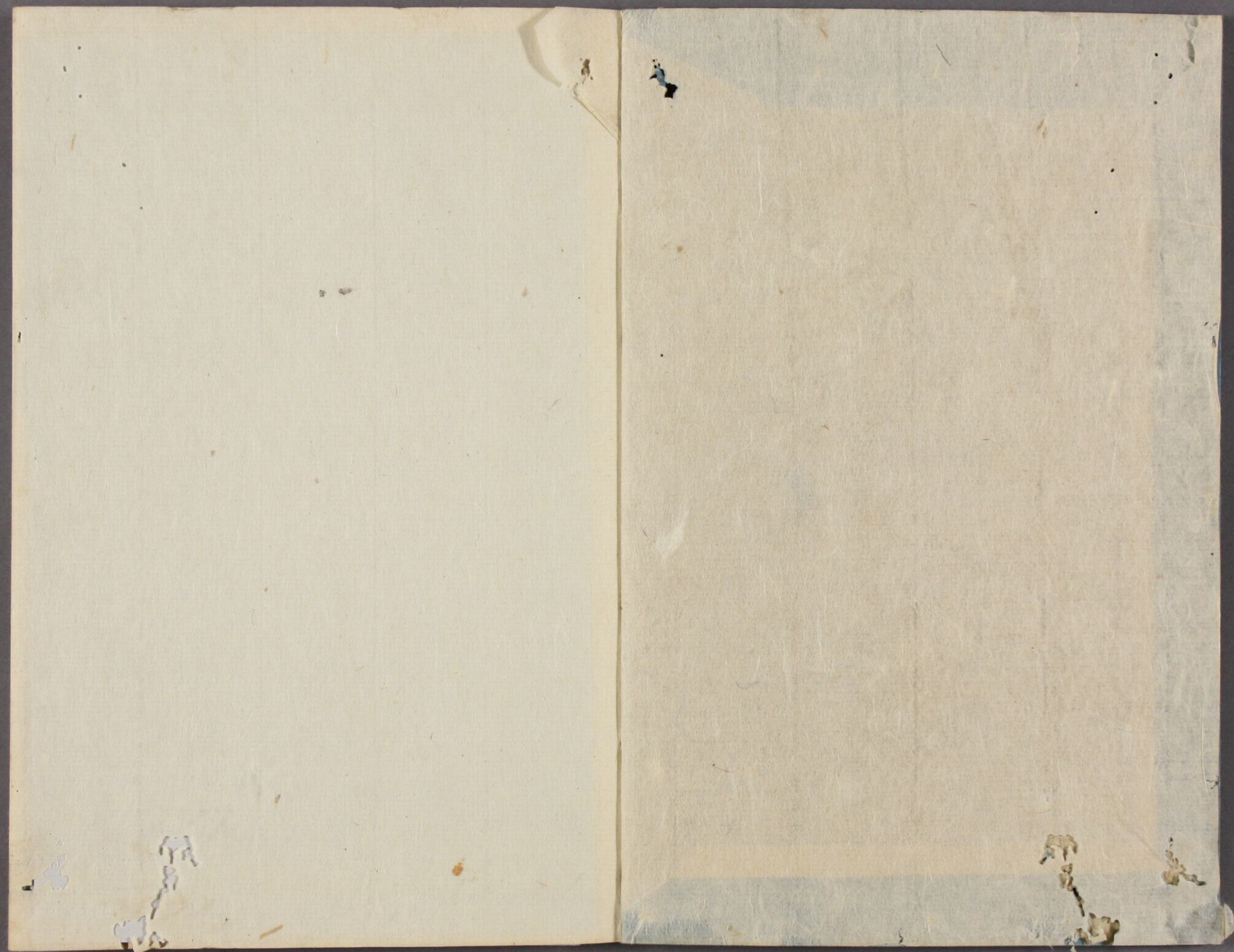


復撰集新抄

復

四





後撰和歌集卷第四新抄

夏歌

野あらし

よみ人しるべ

ふりり夏衣なりぬまぎる人きくかきうきなり

○夏衣なりて、妻の衣を更へ改免つまど、あゝ人までいのちうきるよ

となり、續古今雅上、海、あゝ見えは夏の衣なりぬれど、うきをかき

らぬ身をいのちせん、とあるかきをも、引合せてふべし。四句の

さゝも、俗言小すで、とよにをし、拾遺雅、あゝうき年にもあまど

も言の味き、ふかきうきなり、などの類なり。さて、更衣の

日、衣被のなまじ、帳の帷かたびらあどきでもかきうきなり、葵四十

小、西の對小わたり、終へて、衣の人の清あけらひらなり、何ぞや四十



加ふる。云。但し夢光なるも十月の更
 衣なれど。そき方を因に。形どあるが如く。うつり
 のはりたるさ海。まこときば。と問ふも。のりなき。バ。あつる人
 魚を。云。思ひよ。う。う。な。う。う。は。所をよく。ん。て。見る。べき
 なり。今世の。下。ぎ。方の。もの。ま。戸。那。ど。か。思。ひ。く。う。登。て。又。て。も。う。
 る。深。き。ん。を。ん。ね。う。う。か。く。り。め。を。け。あ。お。も。め。り。み。す。わ
 あ。う。き。こ。と。の。つ。い。で。小。お。ど。あ。う。い。た。く。なり。す。べ。て。い。み。へ。の。奇
 を。見る。に。も。そ。時。の。所。の。あり。ま。方。を。よく。思。ひ。く。う。て。ん。う。べき
 なり。

卯ふ乃さけるみやあさりの伊勢集かきねの月ほみ子ききけとやなく霞公くち

○六帖小月をふあひのべ思ひて祢奴ものを時を走鳴わさるう所。
 中あるなどふけり趣意なり。

つうに結ぶ。お母
をかりなぐらひの
をき。ふたはひいて。
うなぐらひせうそ

う月ばうり。なごちねきと傳々所をく傳て。かあうばせうと云
つうはしんと傳々ふ。たとくく傳々れど。

こつろけんと
とけろふ。おと
なく。ゆるり。

○此詞書いひげ師ぎうけくねば上のめく改定するべ
く又おとけくかう侍をねばとある本を又あきう。つゝ
然不見なり。

郭々きやゝかきゝちかなぐりまちどやにのゝ群乃実、妙

○友達を時々ふなぞうへて、必^ず消息ぞんといひくるが、あづきの無き
を、待をふとといへるなり。近^きあづくと、待遠とを對へてふいとせ
るなり。ほあぢ云向^ちり。あづくとある本といふと、その誤なるを
き、さういふまでも何^んぞ、下^さふも、實^{じつ}ある道とハナに、あづ
が、年ふさばりて春をまつあづとも、何^んぞ。

21

社務
と急
まひ
やど
は
を
う
で
あ
ふ
な
く
城
き
の
ぬ
な
し
ん

うねるのかきあるあて。

時日うねるあてやるまやねのもたるにさけるうねる
○ねのもたるにねのもたるむねにといふなり。た今^秋より
見おちぞーぬべきねの枝もたふねるあてといふ
〓小同。

あてのともひきてぬるをうみきとて。

白くふねるねのうねるうねるまてと人のなきのね
○よ句うともといふ料の序なり。されどこのねるあて
見つゝあてふといふとねのね人のねるあてにふつきて
いひやるとなるべし。さるねのねのねのねのねのねのね
里たにねるあてといふなり。ねるあてといふなり。

とねるあてあり。下句のねるあてといふ。ねのね力あるあて
也。ねるあてといふ。

ねるあて

○一本のねるあてといふ。

時日うねるあてやるまやねのもたるにさけるうねる
○時日うねるあてやるまやねのもたるにさけるうねる
かうなる。ねのねのねのねのねのねのねのねのねのね
里。ねのねのねのねのねのねのねのねのねのねのねのね
あてねのねのねのねのねのねのねのねのねのねのねのね

○時日のねのねのねのねのねのねのねのねのねのねのねのね
いや。時日のねのねのねのねのねのねのねのねのねのねのねのね

○ありとの三音をあててとほぐさえて、時々の聲ハすなをぐ。形
 の足るふたふたなり。初二句のつきき。古今 夏 思ひ出る
 と記す。此山の時々といふある類なり。 さておとはすなとといふ
 を。新玉の声ハと云ふふきうせうなり。 鳥獸などの声を。都といへる例を。万葉十八。ぬを玉乃
 月ふむらひて霞の多なく。於登るけし。里遠みりも。同五。乃。乃。乃。と
 きくおへ。小。梅。雲。我。家。の。そ。お。ふ。さ。記。て。ち。る。み。也。又。麻。ふ。も。い。へ。ふ。も。
 古今。秋。上。秋。森。を。ま。づ。う。こ。ふ。せ。て。な。く。麻。の。目。 然。ま。ど。も。その。聲。とい
 ふ。お。足。き。て。お。の。さ。や。々。さ。か。ど。程。あり。 然。ま。ど。も。その。聲。とい
 ふ。を。女。の。聲。ふ。け。う。け。う。に。あ。あ。あ。女。の。方。ふ。と。り。て。あ。た。阿。里。や
 の。み。ま。え。て。と。い。ふ。さ。の。こ。なり。此。こ。と。は。よ。く。や。だ。を。ま。ぐ。い。ぬ。べ。
 女。の。阿。里。と。す。ゆ。と。ハ。存。在。と。す。ゆ。る。事。に。て。古。今 旅。又。伊。勢。物。語。 ぬ。ふ。か。 五。年。を
 は。い。ざ。こ。と。い。ん。初。る。我。身。ふ。人。を。あり。や。な。ー。や。と。又。下。 五。年。を
 登。て。い。ける。い。ひ。な。我。身。を。ば。何。う。を。人。ふ。阿。里。と。い。ら。れ。ん。又。あり

とふふきうせうきものをお坂乃雲の阿あさぞはるけうりな。など
 お。同。ト。 下。に。も。い。ふ。べ。い。 き。に。す。え。て。と。重。て。い。る。を。さ。ま。を。つ。よ。く
 い。へ。る。ふ。て。あ。り。に。ふ。 下。親。二。い。づ。き。を。あ。と。も。日。う。ん。山。 たちと
 へ。 下。親。三。か。ず。い。と。も。さ。ち。と。ま。な。ん。か。き。 名。お。き。こ。と。あ。一。草。も。う。い。や。あ。う。ん。 ち。ど。い。個。の。類。なり。
 影。ー。ら。げ い。せ
 こ。が。う。れ。て。さ。の。き。す。わ。と。も。杜。宇。も。い。な。う。け。ー。小。枝。う。つ。を。勢。よ
 ○お。月。を。結。て。鳴。ん。と。て。本。隠。て。あ。る。と。も。お。あ。う。け。ー。お。も。枝。う。つ。を。 合。習。
 て。あ。あ。う。か。な。う。ふ。う。つ。て。我。石。の。梢。ふ。も。来。鳴。け。と。なり。新。玉。ハ。あ。
 き。橋。あ。ど。に。て。鳴。く。 空。を。鳴。る。さ。ほ。ふ。よ。る。も。多。ふ。れ。ば。そ。き。
 め。く。と。ふ。を。と。 本。隠。て。と。い。ひ。お。な。う。け。ー。母。と。い。ふ。う。り。 枝。う。つ。せ。よ。と。い。へ。る
 なり。き。え。枝。う。つ。せ。よ。と。い。ふ。に。お。の。づ。う。我。身。ふ。も。来。鳴。け。と。云

つゝも結云ながら
はとの命婦よすも
侍々か人のものに
うつりゆふを又
の年かきつむふ
つひてはるもけ
ふ。

をいふとみてすゆなり。お月結といへるを。いふ月を思ふ。
お月をおのづかしくおどもしめて、おはるいふ月おなげばかり。
古今夏きまつ山崎うちにはき今もなりおんきさのあつた。
伊勢系に月つおつてき結万のなとぎんおどしおど
の聲をきうばやなどもあり。

お承つこの命婦おすも侍々男、人のおふうつり侍おる。又
のと。かきつむふつけてかつふつうはけ。

○お圖書いと百部もくてもきき入ぐ。男とあるは、奇
ふするお。他者のまづうのめくすゆれば、のぎき。右上ニ
ナリ。ルヲ云のめく改てえべし。ゆゑに男、他のをとあめて、そ
男の、他の女のおふうつまることをとあひやまらうとも

思へど、まてきおあそび、人のおふうつるを、かつて、他の
男ふうつまるなりと、つゝも結云なり。

良筆義方朝臣

いひて、先—昔の君のかきつむを、おかりと、かきみなりけき
○お杜若の、もろ。昔我が通ひすも、たの時の、かきみ、ゆうりとも
いふべきを、なれ。お他の、もろ、いふて、昔おもいふ、ありぬる、ふとい
ふと、おて、杜若の、色を、かりと、と、上下、お向の、お、の、久き、入、まて
す、と、な、ふ、い、思、ふ、れ、ど、狂、い、さ、う、ん、ぬ、ぐ、お、お、あ、を、
そ、お、圖書と、合、さ、る、お、二、句、昔の、君と、い、る、は、即、つ、この、命、婦
の家、の、も、に、て、そ、お、お、あ、て、ある、杜、若、を、折、て、今、つ、つ、お、お、の、
お、お、ふ、や、り、た、る、あ、う、ん、さ、う、で、は、二、句、の、君、と、い、お、お、ん、ぬ、ぐ、し、
禁中局

お慶の抱え付く女の子の車ふりこ入る付く

少人不知

ど 詔
小 詞
八 字

五

○後撰集新抄四

今ハあふひあどふ事ハ口のはふけても只終ふ事となり
 束向ふ事古今一意ヤドとみえし川ふぢみを地神はうけぢ
 ぞなりになうしもとある事此きもあるべしとわが友古道いへて

題志文

六のて路ち。五月面をミ杜鰭只ひみづれてな。のぬ目ぞ那。美
 ○五月面を只ひ私てとい。もん料おを時の抽を以ていひ。郭てハ。なく
 とい。もん料の序なり。い。貴之集の意。郭お入る。奇ふて。げお意の
 意にて。六帖お。五月面お私を欠け。我おれ。お人をあひ。ぢおおれ。然
 日ぞなき。とある。などの類とおぼし。

月満中にて男女の多うを忌むといふ。讀ふよりていへるにも
あうんの。一就まば二句ハ。男ハ私てといはん料のみにあふべ。

用ある伺なり。

まへ人衆誰あらずにわとぎに思ひの外にあらばうかづん

○抄小。我こそまふ。我方あそむ。此の外の所不鳴うむうへんと
なりと有り。げふけきなむし。はるなどのでふをは。玉張。巴の巻。八系に十二系。二所か一つの例。此核。

なりと有り。げふはきなりし。はあなどのでふをは。玉張。四の巻。此
 猪小か。も。に。とて。古今十に。さうのくのあ。も。ち。ず。り。何。ゆ。ゑ。了
 れんと。只。我。あ。なく。小。回。付。の。ふ。の。あ。も。思。ふ。山。城。の。と。ふ
 を。足。ん。り。を。の。と。と。と。万。葉。八。う。い。く。ふ。を。鳴。も。ゆ。ん。時。多。日。ぎ。一
 の。里。ふ。々。の。み。ぎ。なく。古今十二。こ。ひ。を。な。た。が。あ。ち。と。世。中
 け。き。あ。き。拙。と。い。ひ。ち。あ。す。と。も。又。右。の。う。り。人。を。な。れ。あ。なく。ふ。々
 々の。あ。あ。ど。を。お。す。れて。云。此。橋。を。その。さ。て。り。お。拙。小。對。へ。て。そ。そ
 あ。ぬ。他。の。物。を。例。と。り。なり。古今十に。の。あ。は。馬。あ。人。小。對。へ。て。そ
 他。の。人。を。な。れ。と。い。へ。君。を。お。きて。他。の。人。あ。小。み。だ。れ。と。思。ふ。日
 を。な。く。あ。く。ふ。なり。い。り。く。ふ。を。鳴。も。ゆ。ん。を。他。の。所。う。ハ。鳴。も
 小。々。ん。なり。万。葉。小。を。程。多。い。など。き。く。い。な。れ。なり。か。と。き。は。あ。あ
 ふ。も。何。人。を。我。なり。他。の。人。あ。ち。あ。う。だ。
 我。を。他。の。所。あ。う。ば。と。と。云。なり。

母をいつちそにー花がおもゆる夏を緑乃葉のーけをだ

ふりおとさくとはな—お時を新ふく目をもさへ—つこの程
○お又お顔—そあらで胸—おを二声ともきうぬ新ふおへてよ
あるありとあり。今思ふ。詞書のさうハ。無ふともす也。総くも。
おふくく目をさへんハ。起て別つるをいふあべ—。又お集
ふ。おあけて新ふの一おなきは「ふ」と詞書あり。かゝてまた夏
おのあなり。

安國

あふとえーそふあふてふれ日乃暑がうたをいふがたつこの時
○うてあふこといふとよりかあそがれぞせそてあふふに

と云ひ。そなたもふと足つをばそれふあゝひて、又再度フタビなふと見
る。さもむねと云ふ。友の目も長くれぞ。それづゝ恥をあげきつ
る事かあとなり。うれづゝ恥をもとあるハ、さう難きをあげくそ
ろふ。又日の暮遅きをあげくそあれどなり。

よみ人あふ

うとふらんあまき郭にあらぬ王かきりけさるゆゑのや
○疎すく身を。別をもそしめ通るんを。時多ふ比しそあり。いかに
あてふぞかしをさハ今朝がなくいはり阿まるとくと万々ねれど
伊抱と抄ふなり。師云一首の意ハ今宵は所まできてあるれど
も我を疎^{ソシ}どそとくもそなしてんもとけだ。実ふ事なりハあらうし
を。ちうとふらんわねく。むつまいくらちとけらるゝおろひ咲を

つう子結云二案右大
臣少卿云何々々時惡
小吏一不倍々をう
へのをのこどもみ亡

かゝるまづがわづ—き時をなれもてぬふある。ねなまを
ふすうにき。脚^ツとてすにとりあひて。一首のきハ。高敷の短き
をさぐる。ふて。古今。夏。夏の高敷のふさうとすれが時をなく。一とあふ
ある—のえと何るによりさるやもあへん。又おのづかう。同
—まふふと出さるほもあへん。—。古あふ此類のうハ。
いとまうねがなり。いづこに—
ても。は。古今。ねあを。し。合さる。ふ。べきなり。

三條右大臣少輔傳々時一のびよかや所傳々越うへ乃
をのこどもふ六人ばかり。五月のなごあすこーやうて。月おぢろ

人になり、正月の暮あ
けすこゝろ、ええ月お
ぼろあうけの朝、酒さ
うべんよそへ、お女
のふお入て、侍け
るを、おねわられぐ
ちて、侍さうけに
まやまゝひて、あま
じせかど、おねわられ
あまの女。

なりけるふさげなうへんとそおし入るゆゑ紙少ねをかき
かきゆきりなれどもちやすゝひてあつていふなぞたまふ
まほしくれども

あぶの女

○三氣者大旨のいまぶ少納女をおさしめる若きころ。思て通
ひぬふ女の所の所を。知居る殿上人と云。
位おて。殿上を
ゆるされ。人をとりなり。多
くハ羅一かりをえるべし。五六人をつかち。正月雨すこ
やそ。月の寝たるおふ。此女の病めて酒飲んとそ。縁におし
入るふ。そころち。少納はもはや此女をお離方なりしゆえ
ふ。其親もこの女の許はハ居あはざり。一の殿上人を立休
ひて。少納をは女の隠しうりと申さる少納。あ。を出

つうの終え、五月廿五日
のころ、久しく続いた
けさ男の、おと、おと
くれは、をんか。

ききなれやむの考ある、とある、おども、おひ、合ますべし、まて、延と云
え、ハ、今の係、おも、女の、機、の、経、を、の、ず、お、下、ま、人、あ、延、といひ、機、の
細、の、横、お、長、き、を、引、お、き、を、も、細、を、ハ、へ、
といひ、を、細、を、も、や、び、て、ま、人、あ、ま、と、い、り、

五月廿五日のころ、む、さ、く、た、を、ま、ま、お、け、る、を、ん、な、の、も、と、に
お、う、り、う、り、くれ、を、

女

つ、ま、く、と、お、び、む、る、を、ね、お、と、き、に、と、お、つ、け、を、細、を、な、の、き、け、る
○久しく終、お、ま、ん、若、を、と、あ、る、う、ら、な、れ、を、か、く、お、と、づ、き、終、お、あ、
う、れ、き、お、は、な、て、も、目、お、あ、の、と、ま、お、の、う、さ、も、お、ひ、お、う、ま、て、細、
な、の、き、け、る、よ、や、い、な、り、

歌———

○

○お、人、不、知、と、い、う、う、う、う、と、整、仲、法、師、い、ま、れ、う、り、

お、う、ぬ、き、橋、う、な、と、き、に、お、代、を、あ、う、せ、る、う、さ、す、ゆ、な、り、
か、く、い、ま、お、ま、ま、の、中、替、集

○お、代、を、あ、う、せ、る、ハ、久、く、か、う、ん、を、う、う、と、お、代、を、あ、う、せ、る、ハ、橋、ハ、万、葉
六、ふ、た、ち、を、あ、う、せ、る、ハ、久、く、か、う、ん、を、う、う、と、お、代、を、あ、う、せ、る、ハ、橋、ハ、万、葉
の、本、な、ど、も、い、ひ、て、と、お、ハ、お、な、れ、を、お、う、ぬ、と、い、ひ、さ、て、お、う、せ、る、ハ、
代、を、お、代、を、あ、う、せ、る、ハ、久、く、か、う、ん、を、う、う、と、お、代、を、あ、う、せ、る、ハ、橋、ハ、万、葉
お、あ、う、せ、る、ハ、と、お、あ、う、り、か、く、ま、お、あ、う、の、時、の、風、お、う、な、り、け、を、お、
お、の、き、も、あ、う、ん、と、お、う、き、く、思、を、

お、う、せ、る、ハ、と、お、あ、う、り、か、く、ま、お、あ、う、の、時、の、風、お、う、な、り、け、を、お、
○万、葉、十、の、あ、う、せ、る、ハ、初、向、橋、お、う、と、何、り、署、解、え、お、う、の、故、を、お、う、
お、う、せ、る、ハ、と、お、あ、う、り、か、く、ま、お、あ、う、の、時、の、風、お、う、な、り、け、を、お、
お、う、せ、る、ハ、と、お、あ、う、り、か、く、ま、お、あ、う、の、時、の、風、お、う、な、り、け、を、お、

とつたをききなりと。師翁いそねなり。

師尹朝臣のすむわらふて侍る時ととなりけききなりとお
て侍るれどもはききなりと。あいのかゝる方ふおなり侍る。

ち政大臣

なご—こきいづれともね—みほへどもおなれてさききなりなり
○他者を政大臣より一氣、貞任公より。師尹朝臣ハ、貞任公の末の子。内
侍、かゝる妻とていひて。同じく長女なり。就きき。尚侍子も師尹も共
小我子とていづれともおなりおなりけき中に。をさきき方師わ
ききけきれはききなりと。あそねを信よ。カアイキムゴラニ
何などいふと。お帳、あや—おいづれもかき—おききなり
てあや—いふおこきなり。

きい—らき。

ふみ人きき

あで—このあなり方ふなりはなりけきけきなりなり。

○一箇のきかきなり。あな—。万葉十よ。おききなり。このきき
ききなり。我なり。おききなり。おききなり。おききなり。おききなり。
おききなり。おききなり。おききなり。おききなり。おききなり。おききなり。
のききなり。おききなり。おききなり。おききなり。おききなり。おききなり。

○はきいといふ難—。奥義抄より。おききなり。おききなり。おききなり。おききなり。
おききなり。おききなり。おききなり。おききなり。おききなり。おききなり。
おききなり。おききなり。おききなり。おききなり。おききなり。おききなり。
おききなり。おききなり。おききなり。おききなり。おききなり。おききなり。

おきさんと整おきする人の作あどふもやうなるにもあらん
あ。されどたうふきんるうなれば。程よく考へべきなり。

夏の夜乃月をほどもく明ぬきどあ——なぐさお月をぞかこちをりふなぐさ

○はあもいとんる——。奥義抄より月見るほどもあく明ぬきを朝
の同日の如ぬをどを。おとあひを——ををるなり。かろつとい。お
とあ——いひあすとなりとあきども。穏やもどうれき。師翁云。友
のねをどあく明なれど。夏の夜乃月。おまを眺めあれば。おへお
朝の音を遠く——。月。おを眺めかこちをきこるよといふなる。屋
——とそねる。かこちを。かろつけめて。兼愛集より雪打る年
なり。うき梅とかこちをきこるやいさぬとあるなぞ。かこちを
のかこちをきこるやいさぬとあるなぞ。かこちをきこるやいさぬとあるなぞ。

かこちをきこるやいさぬとあるなぞ。かこちをきこるやいさぬとあるなぞ。

○抄より。鳥和名鳥雀淮南子。遊仙窟よりやもえがうはとふみ。源氏

舟をきこるやいさぬとあるなぞ。かこちをきこるやいさぬとあるなぞ。
稀鳥雀南飛雀は心の由童蒙抄よりあり。お明てかこちをきこるやいさぬとあるなぞ。
夏の月の入あつれくるさほなり。おとあひを——ををるなり。かろつとい。お
とあ——いひあすとなりとあきども。穏やもどうれき。師翁云。友
のねをどあく明なれど。夏の夜乃月。おまを眺めあれば。おへお
朝の音を遠く——。月。おを眺めかこちをきこるよといふなる。屋
——とそねる。かこちを。かろつけめて。兼愛集より雪打る年
なり。うき梅とかこちをきこるやいさぬとあるなぞ。かこちをきこるやいさぬとあるなぞ。

庭。菅菰万葉の待ふ。鶴後ともあり。又まふお前の下向などのさへ。
きはるそこのすゆるなり。漢國の鶴といふおち。を思きまふ。お
まども。うてかさだといふ。鳥^{カラス}などの話はいあうぞうべ。
浮舟巻の中。測さねたなり。かさだも。うとあねだ。いづきま
ても。時の中。一種とすゆるなり。よりて。此葉のあをも。まふおの
あより合せて。夏秋。かさ。あね。あを。飛城て。鳴りく形の。白く光る。
を。見て。うちほく。短歌の月。の。山。端。不。限。し。よと。思ふ。といふ。さ
ん。方。短。き。なり。夏の。あ。う。と。思ふ。短。き。歌。な。れ。バ。月
の。ほ。ろ。の。早。や。ね。なり。かさ。かさ。だ。の。子。又。漢。ふ。て。鶴。と
いふ。お。の。こと。お。と。い。と。妻。き。後。あ。ね。ども。う。も。な。れ。お。記。お。せ。り。
妻。う。い。か。こ。を。見て。ん。ほ。べ。

秋をて夏をてゆけおちとぎにあらとあるなり。ちこちすき

○まゆらうなり。万葉八時を弄き小蛇の秋風は萩咲ぬをやらゑの
と。きとゆるふやを。

あつこのみこの。あをを。と。て。といひ。ゆる。な。れ。だ。わ。う。の。あ
さ。みの。袖。ふ。つ。みて。

○此詞も。い。さ。う。な。う。な。う。ぬ。き。なり。大和物語。小。蛇。の
み。こ。小。武。部。々。あ。す。と。あ。ひ。々。時。に。あ。さ。づ。い。々。う。な
あ。なん。は。男。を。い。と。め。だ。と。思。ひ。う。け。な。る。を。も。え。あ
ま。は。ざ。り。々。う。う。う。う。あ。り。き。々。を。か。き。と。て。と。け
あ。う。ふ。の。う。め。を。せ。れ。だ。が。さ。みの。袖。小。蛇。を。と。て。つ
つ。て。ほ。ら。ん。ど。ら。と。と。は。え。さ。せ。け。る。つ。え。ども。え。と。

花もちをほとぎんえいねるすであふもゆのすなうにふるの柳

花乃春をもいづるふらうか身ハまづはのなりなり

○懶情身いとかく。是等の危者なをもむなり。賞瓶もをばよ。こし
 けりなりと云て。我も思も。互に就たりといふをふく先なるなり。
 此の面あり。うけあはし。句を是等のなりと。詞の上にて。我身あり
 のをいひて。さて。彼方よりいひ。おろせ。うかき。よ。こ。こ。
 なるなり。そのうーとい。俗言。タイゲナ。お。ブ。シヤウナ。物クサ

伊などいふを。後世は憂き事とんぬる者供なるべし。終身大
人玉哉といわれり。末句ののこる信ふ。トカクと言にを。

影——受

ふみ人あうべ

夏む——の身を^{もを}と^もて^{伊勢集}た^るるあ^らば我やあ^らん人目もる身ぞ

○夏虫^飛の火^火入^入て身を^身を^をあ^あひ^ひても魂^魂を^をあ^あち^ちてある物^物な^なるべ^べ。あ^あも
我がんとてそれをあ^あひ^ひて身を^身を^をあ^あち^ちてあ^あら^らん身^身ぞ^ぞあ^あら^らん人^人目^目ぞ^ぞあ^あら^らん
を^をつ^つむ^むるを^をあ^あひ^ひてんや^やす^すきを^をか^かく身^身の^のあ^あら^らんゆ^ゆあ^あら^らん人^人目^目ぞ^ぞあ^あら^らん
らんあ^あら^らんそれを^をあ^あひ^ひてんや^やす^すきを^をか^かく身^身の^のあ^あら^らんゆ^ゆあ^あら^らん人^人目^目ぞ^ぞあ^あら^らん
ら^らを^をハ^ハ魂^魂ぞ^ぞあ^あら^らん。四^四句^句ハ^ハ我^我も^も我^我ぞ^ぞあ^あら^らんと^とい^いふ^ふ言^言なる
べし。其^其中^中法師^{法師}を^を我^我も^もの^の言^言誤^誤や^やと^とい^いふ^ふ言^言なるべし。あ^あら^らん身^身ぞ^ぞあ^あら^らん
る^るハ^ハあ^あら^らん。此^此等^等伊^伊勢^勢集^集よ^よ出^出て^ては^はあ^あら^らん身^身ぞ^ぞあ^あら^らん

ふなつむ——ハ^ハき^きえ^えて^てや^や人^人は^はあ^あら^らんと^とい^いふ^ふ言^言なるべし。あ^あら^らん身^身ぞ^ぞあ^あら^らん

夏虫^{夏虫}あ^あら^らんと^とい^いふ^ふ言^言なるべし。

こ^この^のあ^あら^らん身^身ぞ^ぞあ^あら^らん身^身ぞ^ぞあ^あら^らん身^身ぞ^ぞあ^あら^らん

○此^此等^等僻^僻按^按抄^抄ハ^ハ月^月照^照平^平砂^砂夏^夏夜^夜霜^霜と^とい^いふ^ふ言^言なるべし。あ^あら^らん身^身ぞ^ぞあ^あら^らん

毛^毛ハ^ハ朗^朗詠^詠の^の外^外に^にも^も月^月影^影を^をあ^あら^らんと^とい^いふ^ふ言^言なるべし。あ^あら^らん身^身ぞ^ぞあ^あら^らん
う^うで^でも^もか^かく^くる^る月^月影^影を^をあ^あら^らんと^とい^いふ^ふ言^言なるべし。あ^あら^らん身^身ぞ^ぞあ^あら^らん
を^を眺^眺る^る神^神の^の何^何と^となく^{なく}感^感情^情小^小堪^堪で^でて^て濡^濡る^るハ^ハ月^月影^影の^の言^言なるべし。あ^あら^らん身^身ぞ^ぞあ^あら^らん
き^きわ^わる^るなる^{なる}あ^あら^らんと^とい^いふ^ふ言^言なるべし。あ^あら^らん身^身ぞ^ぞあ^あら^らん
あ^あら^らん身^身ぞ^ぞあ^あら^らん身^身ぞ^ぞあ^あら^らん
あ^あら^らん身^身ぞ^ぞあ^あら^らん身^身ぞ^ぞあ^あら^らん

みふ月なりあまけり。

そなたも天の川原をなぐり後の七日を六極
○終身大人云。詩小雅大東篇云。維天有漢監亦有光。政彼織女。終日七襄。
とて傳曰。襄。反也。何。う。ま。ま。ハ。大。に。美。れ。ど。も。あ。く。り。と。云。
詞。も。似。て。る。や。なり。さ。七。り。と。ハ。七。度。の。後。の。事。なり。後。一。條。院。
の時。時。ハ。七。度。の。後。あり。野。府。記。に。見。え。る。と。い。は。れ。り。
伝。ふ。や。り。て。師。翁。の。考。二。義。あり。云。此。年。ハ。閏。六。月。ある。年。の。初。の。六。月。
晦。日。ハ。川。原。に。出。て。後。を。行。ふ。を。見。え。る。や。り。但。閏。月。あり。年。の。六。
行。ふ。や。り。後。の。六。月。ハ。行。ふ。や。り。も。れ。き。い。ず。き。ふ。く。も。月。後。を。初。の。六。月。ハ。
考。へ。れ。ど。も。未。だ。初。の。六。月。の。こ。と。し。て。り。や。なり。今。秋。の。晦。日。ハ。
み。き。ぎ。を。行。ふ。や。り。織。女。を。天。漢。を。七。り。と。す。と。い。ふ。本。文。も。あ。り。
が。初。の。晦。日。ハ。せ。ば。と。立。う。り。是。後。の。晦。日。を。み。き。ぎ。を。用。ひ。よ。と。よ。

先。き。なり。此。後。を。七。度。の。後。の。事。と。入。用。し。た。が。天。の。川。原。
を。七。り。と。云。本。文。を。報。向。よ。せ。る。や。り。なり。又。一。説。を。織。女。ハ。天。
漢。を。七。度。う。り。と。い。ふ。本。文。を。以。て。織。女。へ。み。か。け。る。や。り。なり。そ。
ろ。ろ。織。女。を。七。月。七。日。の。夕。小。天。の。川。原。へ。出。る。事。の。なり。さて。七。夕。
の。祭。り。を。す。べ。て。七。の。數。を。揃。へ。て。あ。る。や。り。又。も。織。女。ハ。七。度。の。
後。と。い。ふ。や。り。又。川。原。へ。出。て。行。ふ。や。り。に。も。あり。七。夕。も。な。ど。を。
き。以。の。ま。き。ぎ。を。み。き。ぎ。と。あ。れ。ど。此。さ。海。の。縁。あ。る。や。り。と。を。と。り。合。せ。
て。よ。き。や。り。と。なり。一。首。の。ま。ハ。今。こ。の。川。原。へ。出。て。人。と。き。み。ぎ。
ぎ。を。す。る。が。今。年。ハ。閏。六。月。の。ある。や。り。お。ま。き。七。月。七。日。まで。や。日。數。
の。な。ど。ある。や。り。お。ま。き。た。か。き。と。お。ま。き。み。き。ぎ。織。女。を。な。る。や。り。後。の。六。月。
の。三。十。日。を。み。き。ぎ。を。用。ひ。よ。と。い。は。れ。り。なり。か。く。て。

